

研 究

障害特性に合わせたプレパレーションの効果
～全身麻酔下歯科治療において～

中村美寿穂, 桑嶋瑞枝, 田中とせ, 吉田江利子, 馬渡 恒, 荒屋愛子

八戸赤十字病院 3B 病棟

Key words : 精神発達遅滞, プレパレーション, 全身麻酔下歯科治療, 障害特性

論文要旨

精神発達遅滞・自閉症児は、慣れない入院や治療の受け入れが困難な場合が多い。今回 3 事例に対し治療を受け入れる準備や心構えができるように、治療前に写真や絵など視覚的に訴えるプレパレーションを行い、強い混乱やパニックを防ぐことができた。治療前のプレパレーションは、患児の治療に対する不安軽減や治療を安全に受け入れることに繋がり、プレパレーションは有効だったと考えられた。

Ⅰ. はじめに

当院では、精神発達遅滞・自閉症児の歯科治療は、全身麻酔下で行われ、2泊3日のパス入院としている。精神発達遅滞では、知能の発達の遅れがあり、社会生活にうまく適応できない。自閉症は、対人関係の能力、意思疎通の能力、行動面の障害という3つの障害を持っている。そのため、慣れない入院、治療を理解できないことが不安をかきたてる原因となり、治療を受け入れることが困難である。精神発達遅滞児・自閉症児は障害の種類や程度、年齢、性格によっても一人一人障害特性の現れ方が異なることを理解し、それぞれの障害特性を把握して対応することが大切である。

プレパレーションとは、子どもが病気や入院によって引き起こされるさまざまな心理的混乱

に対し、準備や配慮することによって、その悪影響を和らげ、子どもや親の対処能力を引き出すような環境を整えることである¹⁾。Vernon は、プレパレーションの目的は、①子どもに正しい知識を提供すること、②子どもに情緒表現の機会を与えること、③心理的準備をととして医療者との信頼関係を築くこと、と言われている¹⁾。発達障害児における採血時のプレパレーションに関する研究²⁾では、予測を立てて行動することが困難な発達障害児に対して、プレパレーションは不安による混乱を軽減できる手段になることが示されている。

精神発達遅滞・自閉症の患児、家族にプレパレーションを行うことは、全身麻酔下での歯科治療（以下治療とする）に対する正しい知識を分かりやすく与え、患児が自分の置かれている環境を心の中に思い浮かべやすくなり、治療に対する不安軽減や治療を安全に受けられることに繋がると考え、本研究に取り組んだ。

Ⅱ. 研究目的

患児の障害特性と家族の思いや患児への関わり方を把握し、具体的な言葉や写真を見せてプレパレーションを行うことが、治療に対する不安軽減につながり、治療を安全に受けられるようになるかを調べた。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン：仮説事例型研究
2. 研究対象：初めて全身麻酔下で歯科治療を行う精神発達遅滞、自閉症児で、写真や簡単な説明を理解できる状態の児3名とその家族
3. 研究期間：平成24年7月～平成25年5月
4. 研究方法

1) プレパレーションブック（以下、ブックとする）の作成

入院経過をその場面ごとにスタッフがモデルとなり人形を用いて分かりやすく写真にまとめた。写真には患児が分かりやすい言葉で説明を添え、かわいい絵やキャラクター（アニメの登場人物）をつけた。

ブック使用時の注意点として、患児に恐怖心を与えないことをスタッフ全員で確認した。そのためプレパレーション前に家族に見てもらい、除くページや注意点を確認し、その後にプレパレーションを実施した。

2) 患児の障害特性の把握

専門誌に掲載されていた問診シート³⁾を参考にし、当科独自のものを作成した。これに基づき、入院時に家族より聴取し、障害特性を把握した。

3) プレパレーション実施前後に入院、治療に対する聞き取りアンケート実施

プレパレーション実施前に家族から今回の入院や治療に対する気持ち、不安な気持ち、プレパレーションブックについてアンケート聴取した（以下、プレパレーション実施前家族アンケートとする）。

プレパレーション実施前後に患児からわかりやすい言葉に変え、家族同様のことをアンケート聴取した（以下、プレパレーション前後児アンケートとする）。

4) プレパレーション実施

プレパレーションは治療前日に家族と患児に行い、適宜当日も行った。プレパレーション実施中の患児の様子を記録した。

5) 退院時の聞き取りアンケート実施

退院時家族から問診シートについて、プレパレーションブック、治療や不安についてアンケート聴取した（以下、退院時家族アンケートとする）。退院時患児からもわかりやすい言葉に変え、家族同様の内容を聴取した（以下、退院時児アンケートとする）。

Ⅳ. 倫理的配慮

家族にのみ、研究の意義、目的、方法、研究への参加は、個人の自由意志であること、研究以外では使用しないこと、いつでも中断できることを文書で説明し、家族の同意を得た。

Ⅴ. 結 果

1) A君：5歳1カ月、精神発達遅滞

多動であり、身体に触られることが苦手な児で、パニックになると大声を出すことがあった。対処方法は静かな場所に移動することであった。

患児は、母から、入院して歯の治療をすると言明を受け、母と入院してきた。その際歯を指さしてうなずき、歯の治療を受けることを理解している様子であった。プレパレーション前、家族アンケートで母は、①全身麻酔の治療に耐えられるのかと不安が大きい。②障害があり、まだ5歳と小さいので体力が大丈夫か心配。③児が不安な気持ちなのかについては分からない。④ブックについてはアニメの登場人物であるキャラクターを見て興味が湧き、様子が分かるのでとても良い、と答えた。プレパレーション前後児アンケートでは、患児は静かに話を聞いていたが、患児からの返答はなかった。プレパレーション中は動き回らず話を聞き、写真や絵をじっと見ていた。

入院時血圧測定は出来なかったが、プレパレーション後血圧測定が出来るようになった。治療当日は落ち着かなく多動ではあったが、機嫌良く母と手をつなぎ治療室へ歩いて入室した。治療後は体動が激しく啼泣が続き、酸素マスクを嫌がる様子があったが、母に抱っこされ

徐々に落ち着き眠り始めた。

退院時、家族アンケートでは、①子供の特徴や普段の様子を知ってもらえて安心した。②ブックは分かりやすく写真を見ながらとても良かった。③治療の流れは写真を見たことでイメージでき、見通しがつき、不安軽減につながった。④プレパレーションで治療を安全に受けられることにつながった、と答えた。退院時、児アンケートでは看護師の問いかけにうなずいていたが返答は無かった。翌日は、口腔内に指を入れて気になる様子があったが、笑顔で退院した。

2) B君：12歳4カ月、精神発達遅滞

常にひもをいじって遊んでいる児であり、耳に触れる事はとても嫌がった。ひもを取られたり、児との約束を守らなかったり気に入らないことがあるとパニックになったことがあった。母は小さい弟の世話のため、祖父が児の世話をしており、祖父と入院してきた。プレパレーション前、家族アンケートで、祖父は、①児に対して点滴をして歯の治療をすると説明したが、児は分からない様子だった。②不安については、病院に任せているので大丈夫。③児は何をされるかわからずに入院してきたので不安はあると思う。④プレパレーションについては児がやることを理解しないと不安になるのではないかと。⑤安全確保につながるかはよくわからない、と答えた。プレパレーション前後児アンケートでは、ひもで遊んだりジュースを飲んだりしながら話を聞いていたが返答はなかった。プレパレーション中は、患児はひもで遊びながらブックの写真を見て時々返答があった。さらに、祖父が看護師の説明を繰り返したり、患児がわかるように説明していた。

入院時から落ち着きがないが、バイタルサイン測定時は協力してくれた。治療当日の行動も落ち着きがないが、祖父と手をつなぎ治療室に歩いて入室した。治療後はしきりに静脈留置針を触り就寝時自己抜針したが、その他は穏やかに過ごした。

退院時、家族アンケートでは、①子供の特徴や普段の様子を聞いてもらい安心した。②ブックは理解でき見通しがつくのでとても良かった。③治療の流れはイメージができ、子供が安心したので家族にとっても不安軽減になった。④治療を安全に受けられることにつながった、と答えた。退院時、児アンケートは看護師の質問に自分から「おりこうさん」と答え、また、看護師の声をおうむがえしで答える様子があった。笑顔で祖父と退院した。

3) C君：6歳5カ月、精神発達遅滞（知的障害あり）

音に敏感で、薬や注射をとっても嫌がった。自分が吐いた時に驚き、パニックになり、走りだしたことがあった。母は入院前日に病院に行くと説明したがいやだと言ったので、当日何も説明せず一緒に入院してきた。プレパレーション前に母と相談し注射に関する説明は行わないこととした。プレパレーション前、家族アンケートで母は、①初めての治療で不安が大きい。②プレパレーションについては良いと思う、と答えた。プレパレーション前後児アンケートでは、看護師が絵本を見てみようといかけるとうなずき、絵本を見てからどんなことをするか分かったか問うと、首を振り嫌だと答えた。プレパレーション中はじっとブックを見ており、時々返答があった。

患児は入院時、怖いと言いつ機嫌に啼泣していたが、プレパレーション後は啼泣やパニックを起こさず、静かに過ごし、治療当日はバイタルサイン測定に協力し、母と共に手をつなぎ歩いて治療室に入室した。治療後は帰室後一時間ほどで覚醒し静かにテレビをみて過ごした。

退院時、家族アンケートでは、①入院時児の特徴を問診され安心した。②プレパレーション後は、アンパンマンの所には行きたくないと言っていたが、当日はいやだと言わず言うことを聞いてくれて良かった。③母は絵が分かりやすく、治療の流れをイメージ出来た。④子供に何をやるのか伝えられたため不安が軽減でき

た、と答えた。退院時、児アンケートでは、患児が落ち着きがなく、アンケート聴取する状態ではなく、出来なかったが、普段の活発な患児に戻っており、予定通り退院した。

VI. 考 察

発達障害児は現状把握、状況認知が難しく、初めて経験することや予想のつかない場面では強い混乱やパニックに陥りやすいと言われている。今回プレパレーションを行った3名の児もパニックを起こしたことの精神発達遅滞児であった。

本研究では、3例ともプレパレーションが不安軽減につながった、という結果が得られた。このことは、以下の2つの要因であったと考えられた。第一の要因は、患児、家族との関わりを多く持ち、障害特性と家族の思いや児への対応を把握するよう努めたことであった。すべての例で家族から児の特徴や普段の様子を分かってもらえて安心した、というアンケート結果を得られたことから推測できた。第二の要因は、患児に恐怖心を与えないことを前提とし、事前に家族にブックの内容を確認してもらい、家族の希望を取り入れ、障害特性に合ったプレパレーションを行うよう努めたことであった。その結果、プレパレーション後、A君は血圧測定が出来るようになり、B君の祖父は子どもが安心したので家族にとっても不安軽減になったと述べ、C君は静かに過ごすことが出来た。このように、今回のプレパレーションで自分の置かれている環境を思い描くことが出来たため落ち着くことができたのではないかと考えられた。

絵本を用いたプレパレーションによる対処行動の比較に関する研究において、絵本を用いてのプレパレーションは、痛みのある処置を受ける小児の心理的準備につながり、参加しようとする主体的な行動を促したと述べられている⁴⁾。村松が、発達障害児の特性として、耳で聞いて意味を理解するのは苦手、目で見て理解するのは

得意と述べている⁵⁾ように、視覚に訴えるプレパレーションが効果的なことから、今回実際と同じ場所で場面ごとにモデルを使った写真を撮りプレパレーションを行ったことが有効であり、患児自身が心理的準備をし、パニックを起こすことなく治療に臨むことができたのではないかと考えた。

B君の祖父は児の理解が不十分だと不安につながるのでないかと考え、プレパレーション時に看護師の説明を繰り返したり、児が分かるように説明していた。このことは、児の理解しやすいようなプレパレーションの大きな一助となった。

患児が安全に治療を受けられたかについては、①入室がスムーズだった、②帰宅後も強いパニック発作を起こさなかった、③3例の退院時家族アンケートでプレパレーションが安全につながったという評価を得られたことから、今回のプレパレーションが発達障害のある患児に対して、安全に治療を受けさせることに寄与したと考えられた。

田中らは、発達障害を持つ子供は、対人交流やコミュニケーションが苦手なことが多く、親との連携が重要となる。親との信頼関係を築くことが本人への対応や支援をうまく進めるコツであると述べている⁶⁾。今回児と家族と関わる時間を多く持ったことで、私たちは児と家族の間には深い関係があり、家族の安心は児の安心にもつながることを認識した。また、治療を受けることに対する家族の思いを表出できるような話しやすい環境を作ったことは、患児と家族が医療者との信頼関係を築くことにつながったと考えた。

退院時児アンケートで、患児に頑張ったことを認め、褒め、協力してくれたことに感謝を伝え、患児の思いを聞いた。C君は多動で聴取できなかったが、A君は大きなうなずきと笑顔があり、B君は「おりこうさん」と自分を褒めた。及川らは、終了時、患児に終わったことをきちんと伝え、頑張りを認め、褒めることが大

切であり、本人の成功体験と出来るように達成感や満足感が得られるように支援すると述べている⁷⁾。A君やB君にとって今回の入院は成功体験として満足感や達成感が得られ、次も頑張れる感覚を持つことができたと考えられた。

今後も、発達障害児が安全に安心して治療を受けられるよう、家族と協力しながらプレパレーションを実施していきたい。

Ⅶ. 結 論

発達障害児にプレパレーションブックを使用し、の歯科治療前のプレパレーションを行った結果、円滑に治療を行うことができた。これら

から、以下のことが明らかになった。

1) 看護師が患児、家族と関わる時間を多く持ち、障害特性や家族の思いを把握したことは家族の安心感につながり、信頼関係を築くために有効であった。

2) 写真や絵など視覚で伝えるプレパレーションを行うことで児の不安軽減、安全につながった。

3) 患児の理解を深めるためには、患児の特徴を良く知る家族との関わりが不可欠である。

2014年10月 第45回 日本看護学会 急性期看護 学術集会で発表した。

文 献

- 1) 及川郁子, 田代弘子: 病気の子どもへのプレパレーション, 5, 2007, 中央法規出版株式会社, 東京.
- 2) 井出佳奈恵, 平元 泉, 高倉弘美: 発達障害児における採血時のプレパレーションの検討, 日本看護学会論文集 小児看護, 40, 57-59, 2010.
- 3) 高原 牧: 歯科外来での対応, 小児看護, 35, 616, 2012.
- 4) 石垣幸子, 但木由佳, 澤田奈穂美, 中島純子, 加藤由美子, 尾崎友恵, 上村浩太: 絵本を用いたプレパレーションによる対処行動の比較, 日本看護学会論文集 小児看護, 35, 137-139, 2004.
- 5) 村松陽子: 「発達障害」とは何か, 小児看護, 35, 528-533, 2012.
- 6) 田中恭子, 内山登紀夫: 発達障害児への支援の基本的な考え方, 小児看護, 35, 534～540, 2012.
- 7) 及川郁子, 田代弘子: 病気の子どもへのプレパレーション, 16, 2007, 中央法規出版株式会社, 東京.

